

## 3. 鳥類調査

### 3.1 調査実施状況

---

鳥類調査は、春季を平成 23 年 6 月 29 日、夏季を 8 月 1 日、秋季を 9 月 12 日、冬季を平成 24 年 1 月 10 日に実施した。

鳥類の確認種一覧と確認個体数を表 2-3-1 に、確認位置を図 2-3-1～4 に、各季の確認状況の詳細結果を資料編に示す。

年 4 回の調査の結果、平成 23 年は 9 目 23 科 48 種の鳥類を確認した。

### 3.2 種類数

---

確認種数は、春季は 18 種、夏季は 16 種、秋季は 26 種、冬季は 38 種であった。

確認個体数の多い種としては、ユリカモメ、ウミネコ、ハシボソガラスであった。

表 2-3-1 鳥類の確認種一覧表

	目	科	種名	渡り区分	平成23年度				重要種選定基準			
					春季(6月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	保存法	環境省 RL	三重県 RDB	近畿RDB
1	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ	留鳥		2	1	1				
2	ヘリカン	ウ	カワ	留鳥	7	34	22	23				
3	コウノトリ	サギ	サコ	留鳥	1		1				VU	3( 殖)
4			ダ イサギ	留鳥	1	1	4	1				
5			コサギ	留鳥			11	3				
6			アサギ	留鳥	2	3	1	1				
7	カ	カ	マガ	冬鳥				4				
8			カカ	留鳥	5		12	35				
9			コガ	冬鳥				35				
10			ヒトガモ	冬鳥				40				
11			オカモ	冬鳥				25				
12			ハシガモ	冬鳥				3				
13			ホシロ	冬鳥				48				
14			キンクロハシロ	冬鳥				17				
15			スモ	冬鳥				2				
16	カ	カ	ミサコ	留鳥		1	1	2		T	EN	3( 繁殖 冬)
17			サハ	夏鳥			1			U	EN	3( 殖)
18	サドリ	サドリ	イカサドリ	留鳥				1			VU	
19			シロサドリ	留鳥			2	11			EN	3( 殖)
20			ケリ	留鳥				4				
21		サギ	トウネ	旅鳥			4					3( 過)
22			キアシ	旅鳥			1					
23			イツシ	留鳥	2	2	2	3				
24		カモ	ウリカモ	冬鳥		1		360				
25			セウカモ	冬鳥			1	25				
26			オセロカモ	冬鳥				3				
27			ウミコ	留鳥	80	1447	478	92				
28			アシシ	夏鳥	34				希	U	EN	2( 殖)
29	ハト	ハト	サト	留鳥	1	1	1	1				
30			アハ	留鳥	1							
31	フッコウ	カセミ	カセミ	留鳥				2				
32	スメ	ヒバリ	ヒバリ	留鳥	1							
33		ツバメ	ツバ	夏鳥	9	6	6					
34		セキレイ	ハセキレイ	留鳥	6	5	3	4				
35			セウセキレイ	留鳥	1	1	1	1				
36		ヒヨドリ	ヒヨ	留鳥	1		1	1				
37		モズ	モズ	留鳥				1				
38		ツグミ	イソヒヨドリ	留鳥			1	1				
39			ツグミ	冬鳥				7				
40		ウグイス	セッカ	留鳥			1					3( 殖)
41		メジロ	メジ	留鳥				2				
42		ホシ	ホシ	留鳥				5				
43		オシ	オシ	冬鳥				5				
44		アトリ	カラヒ	留鳥	1	1	1					
45		ハタオリ	スズ	留鳥	23	11	3	34				
46		ムクドリ	ムク	留鳥				8				
47		カラス	ハシカラス	留鳥	81	107	57	37				
48	(ハト)	(ハト)	カラハト	家禽類		70	2	20				
9目23科48種				種数	18	16	26	38	1種	3種	6種	7種
				個体数	257	1693	619	868				

注 1)種名及び配列は「日本鳥類目録改訂第 6 版」(2000 年、日本鳥学会)に準拠した。

注 2)渡り区分は、「三重県立博物館研究報告 自然科学第 1 号 2 . 三重県の鳥類相」(1979 年 三重県立博物館)を参考に、一般生態や昨今の県内での確認状況に応じて区分した。

注 3)「保存法」は「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成 4 年 6 月 5 日 法律第 75 号)、「環境省 RL」は「環境省レッドリスト 鳥類」(2006 年、環境省)、「三重県 RDB」は「三重県レッドデータブック 2005 動物」(2006 年、三重県)、「近畿 RDB」は「近畿地区 鳥類レッドデータブック」(2002 年 京都大学学術出版会)を示す。

際希：国際希少野生動植物種、EN：絶滅危惧 B 類、VU：絶滅危惧 類、NT：準絶滅危惧

2：絶滅危惧種、3：準絶滅危惧種、4：特に危険なし

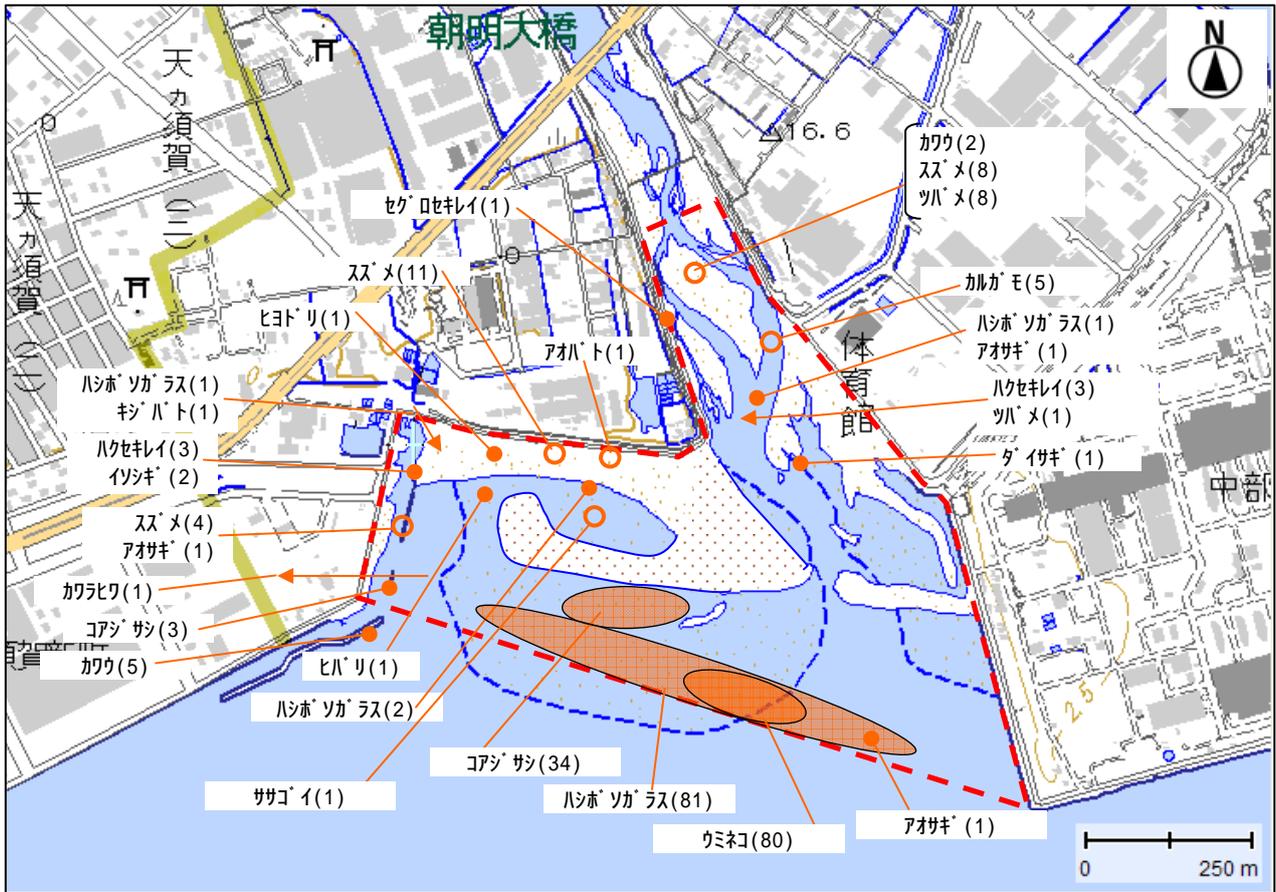


図 2-3-1 春季鳥類確認位置

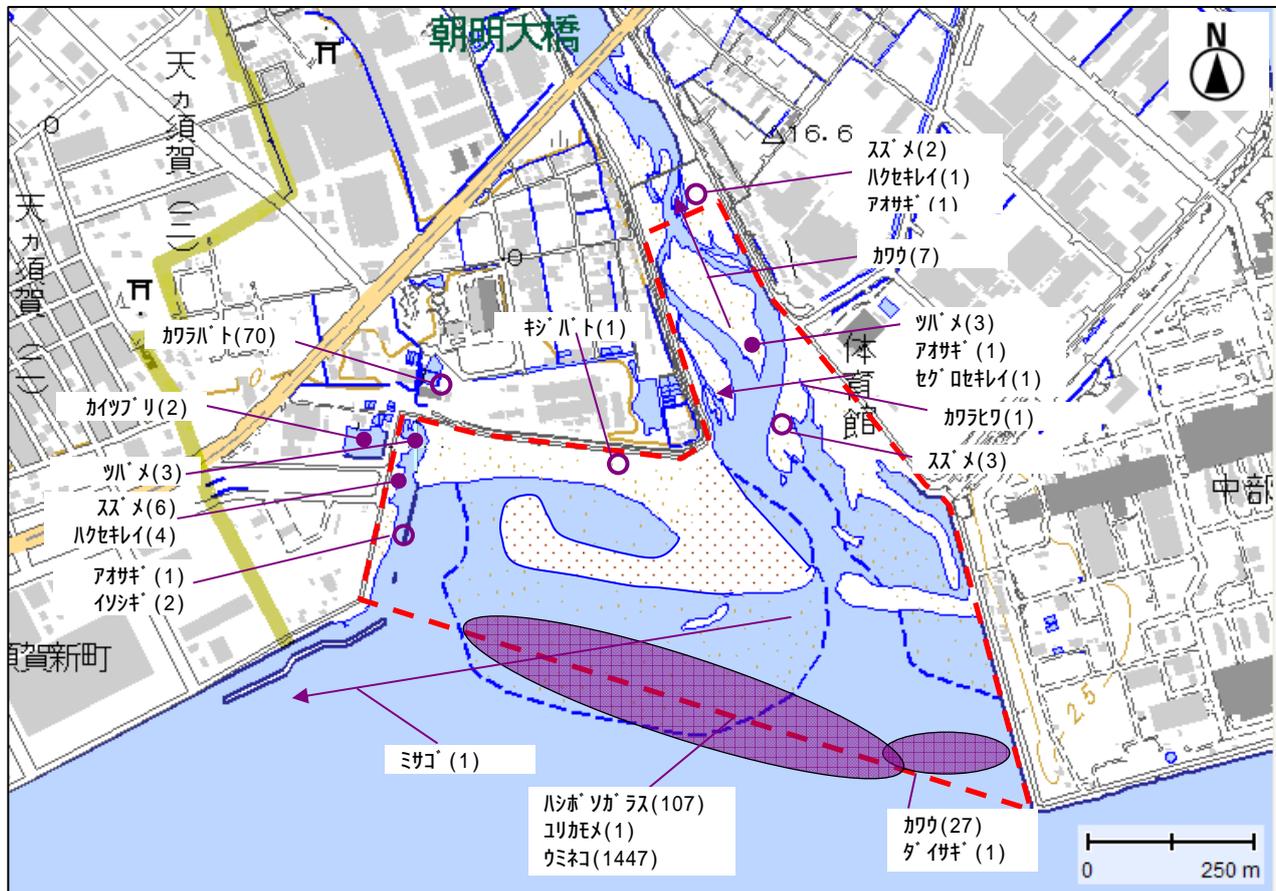


図 2-3-2 夏季鳥類確認位置

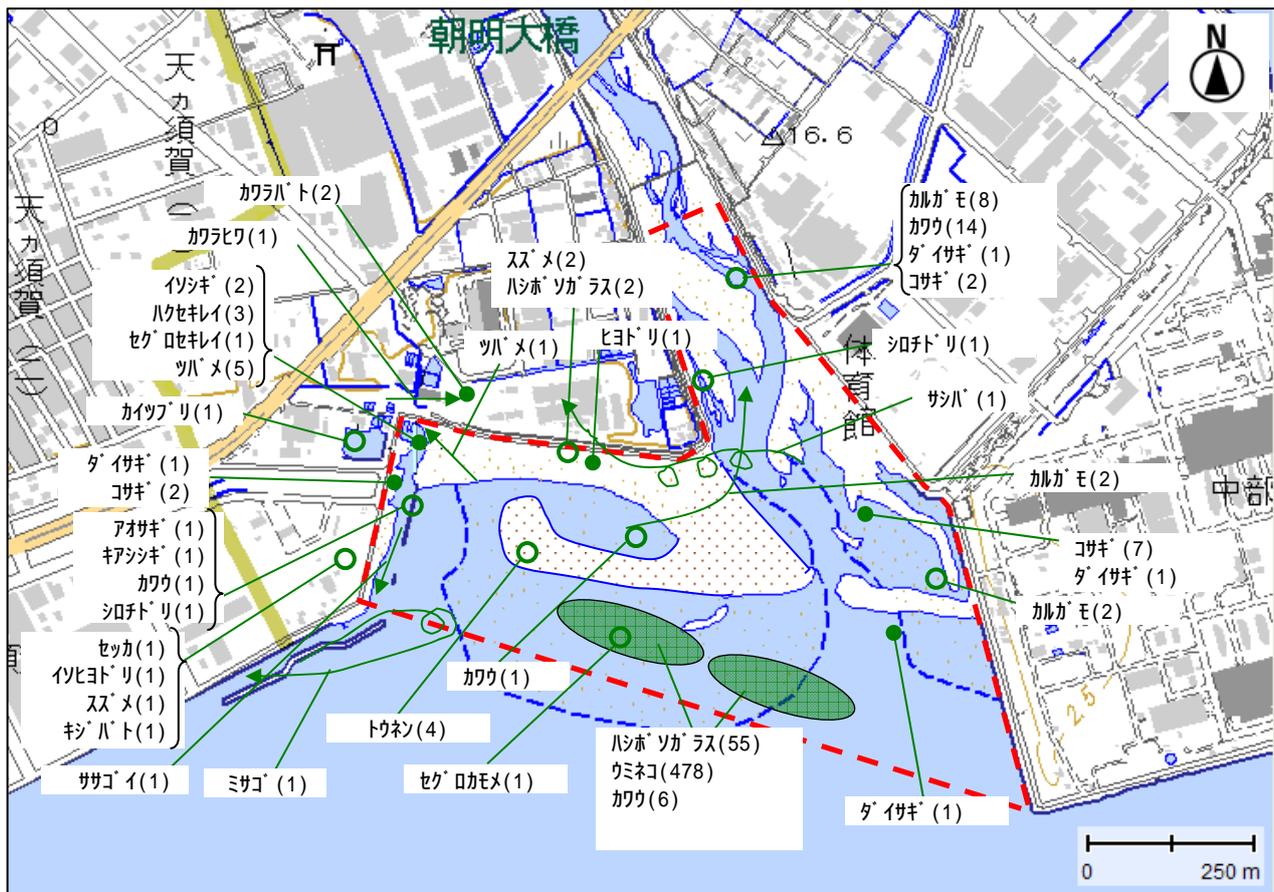


図 2-3-3 秋季鳥類確認位置

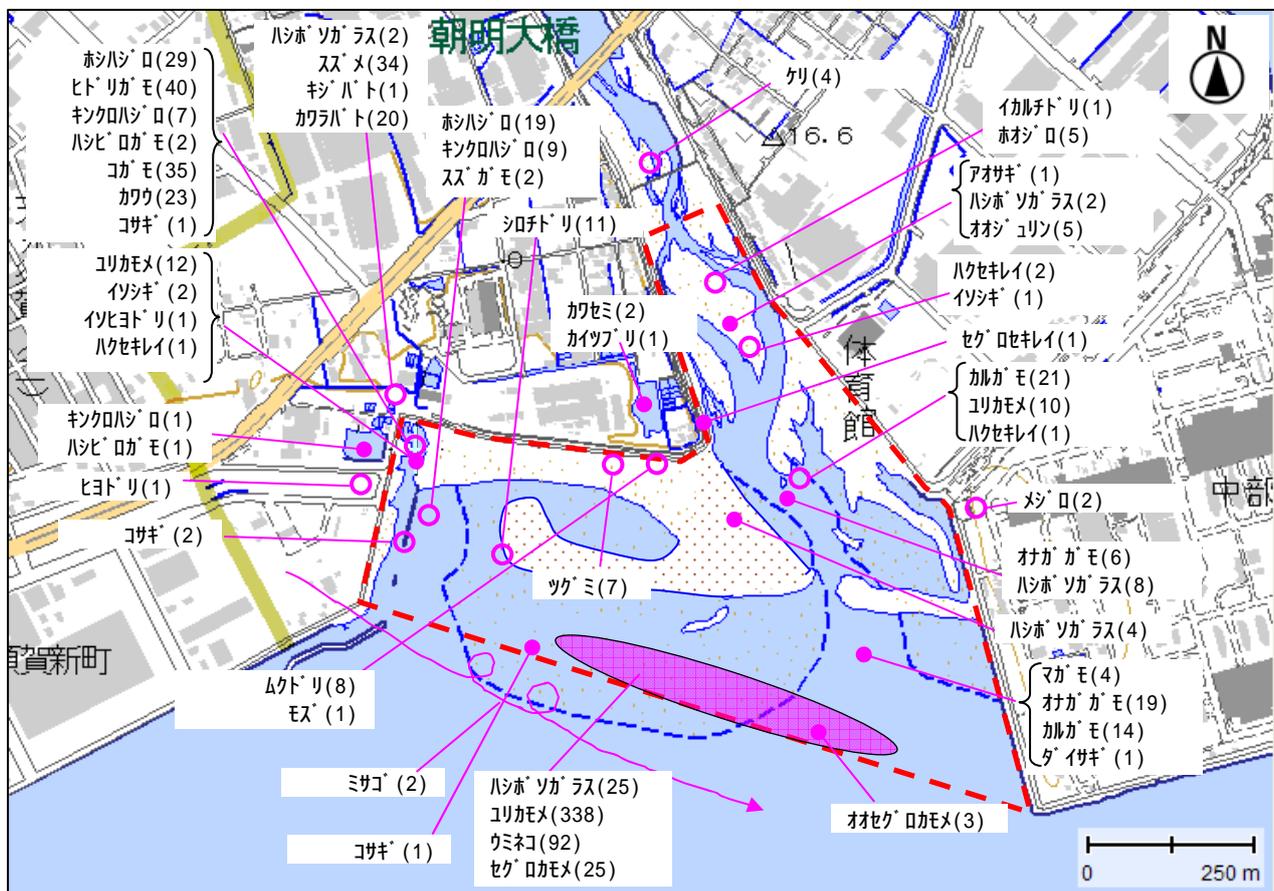


図 2-3-4 冬季鳥類確認位置

### 3.3 出現状況

目別の種数及び個体数の集計結果を表 2-3-2 に、季節変化を図 2-3-5 に示す。

季別の種数及び個体数は、春季が 18 種 257 個体、夏季が 16 種 1693 個体、秋季が 26 種 619 個体、冬季が 38 種 868 個体であり、種数は冬季が、個体数は夏季が多い状況であった。

目別種数では、四季を通じてスズメ目が多く（春季：8 種、夏季：6 種、秋季：9 種、冬季：12 種）、次いで冬季のカモ目（9 種）、秋季のコウノトリ目及び冬季のチドリ目カモメ科の 4 種であった。個体数では、春季にはスズメ目が最多であったが、夏季以降はチドリ目カモメ科が最多であった。

表 2-3-2 鳥類の目別種数及び個体数

	春季		夏季		秋季		冬季	
	種数	個体数	種数	個体数	種数	個体数	種数	個体数
カイツブリ目	-	-	1	2	1	1	1	1
ペリカン目	1	7	1	34	1	22	1	23
コウノトリ目	3	4	2	4	4	17	3	5
カモ目	1	5	-	-	1	12	9	209
タカ目	-	-	1	1	2	2	1	2
チドリ目チドリ科	-	-	-	-	1	2	3	16
チドリ目シギ科	1	2	1	2	3	7	1	3
チドリ目カモメ科	2	114	2	1,448	2	479	4	480
ハト目	2	2	2	71	2	3	2	21
ブッポウソウ目								1
スズメ目	8	123	6	131	9	74	12	106
合計	18	257	16	1,693	26	619	38	868

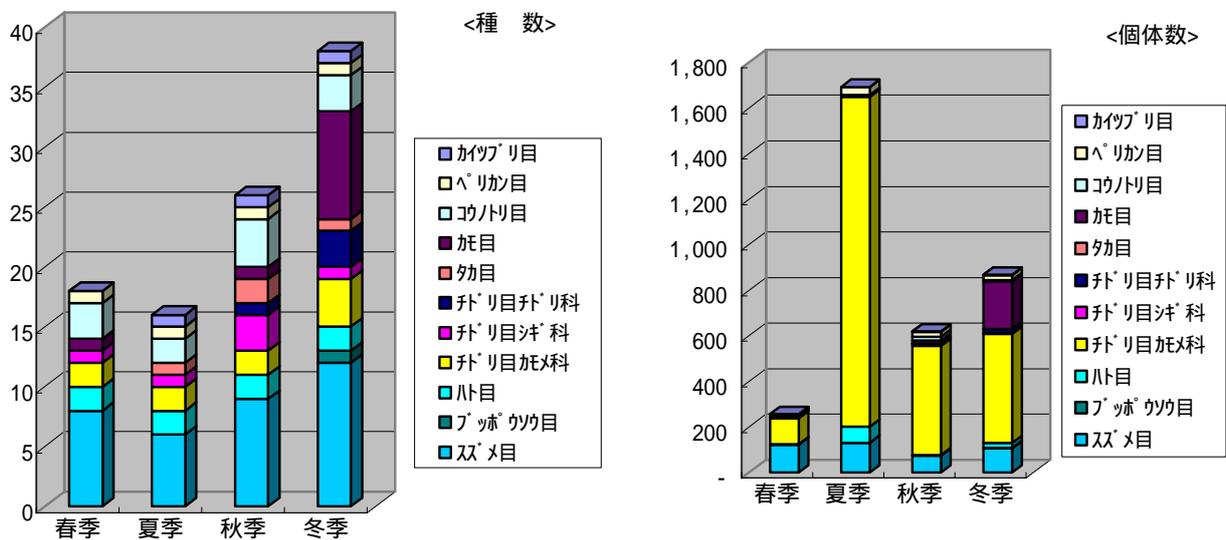


図 2-3-5 鳥類の目別種数及び個体数の季節変化

### 3.4 干潟部利用状況

干潟を利用する鳥類として、水辺に生息するカイツブリ目、ペリカン目、コウノトリ目、カモ目、チドリ目、スズメ目セキレイ科の種のほか、魚食性の猛禽類であるミサゴ、干潟を利用する多数のハシボソガラスが確認された。これらの種の干潟利用域を明らかにするため、食性に着目したグルーピングを行い、表 2-3-3 に示す 8 つのグループに区分した。

各グループの出現状況を次頁以降に整理した。

表 2-3-3 干潟を利用する鳥類のグループ区分

グループ	構成種等	主な食性	現地確認種
1	カイツブリ、カワウ、ミサゴ、コアジサシ	潜水や空中からのダイビングにより、主に魚を食べる。	・カイツブリ ・カワウ ・ミサゴ ・コアジサシ
2	サギ類	浅瀬で主に魚を食べる。昆虫、エビ、カニ等広範。	・ササゴイ ・ダイサギ ・コサギ ・アオサギ
3	陸ガモ類	主に水草や藻、草の実や葉等。その他に水生昆虫、貝やエビ等。	・マガモ ・カルガモ ・コガモ ・ヒドリガモ ・オナガガモ ・ハシビロガモ
4	海ガモ類	潜水して貝類やカニ、水生昆虫、小魚、水草や藻など。	・ホシハジロ ・キンクロハジロ ・スズガモ
5	シギ・チドリ類	ゴカイ、貝、カニ、水生昆虫等干潟の小動物を食べる。	・イカルチドリ ・シロチドリ ・トウネン ・キアシシギ ・イソシギ
6	カモメ類	魚類、カニ、エビ、貝、ゴカイ、草の実や海藻、死体等さまざまなものを食べる。	・ユリカモメ ・セグロカモメ ・オオセグロカモメ ・ウミネコ
7	セキレイ類	カゲロウ、ハエ、ガ等の昆虫類やクモ、イトミミズ等。	・ハクセキレイ ・セグロセキレイ
8	ハシボソガラス	雑食。草木の実や昆虫類などの小動物等。	・ハシボソガラス

### 3.4.1 カイツブリ、カワウ、ミサゴ、コアジサシ

カイツブリは西側水路の西側及び朝明川河口右岸外にある養魚池跡で採食していた。

カワウは四季を通じて確認されたが、利用状況としては朝明川の河口で休息している個体が多くみられた。

ミサゴは干潟上空を飛翔する様子や、魚を探している様子を確認した。

コアジサシは沖側のやや水深のある場所で採餌していた。

表 2-3-4 カイツブリ、カワウ、ミサゴ、コアジサシの季節別出現状況

種名	渡り区分	平成23年度				合計
		春季 6月	夏季 8月	秋季 (9月)	冬季 (1月)	
カイツブリ	留鳥		2	1	1	4
カワウ	留鳥	7	34	22	23	86
ミサゴ	留鳥		1	1	2	4
コアジサシ	夏鳥	34				34
合計	個体数	41	37	24	26	128

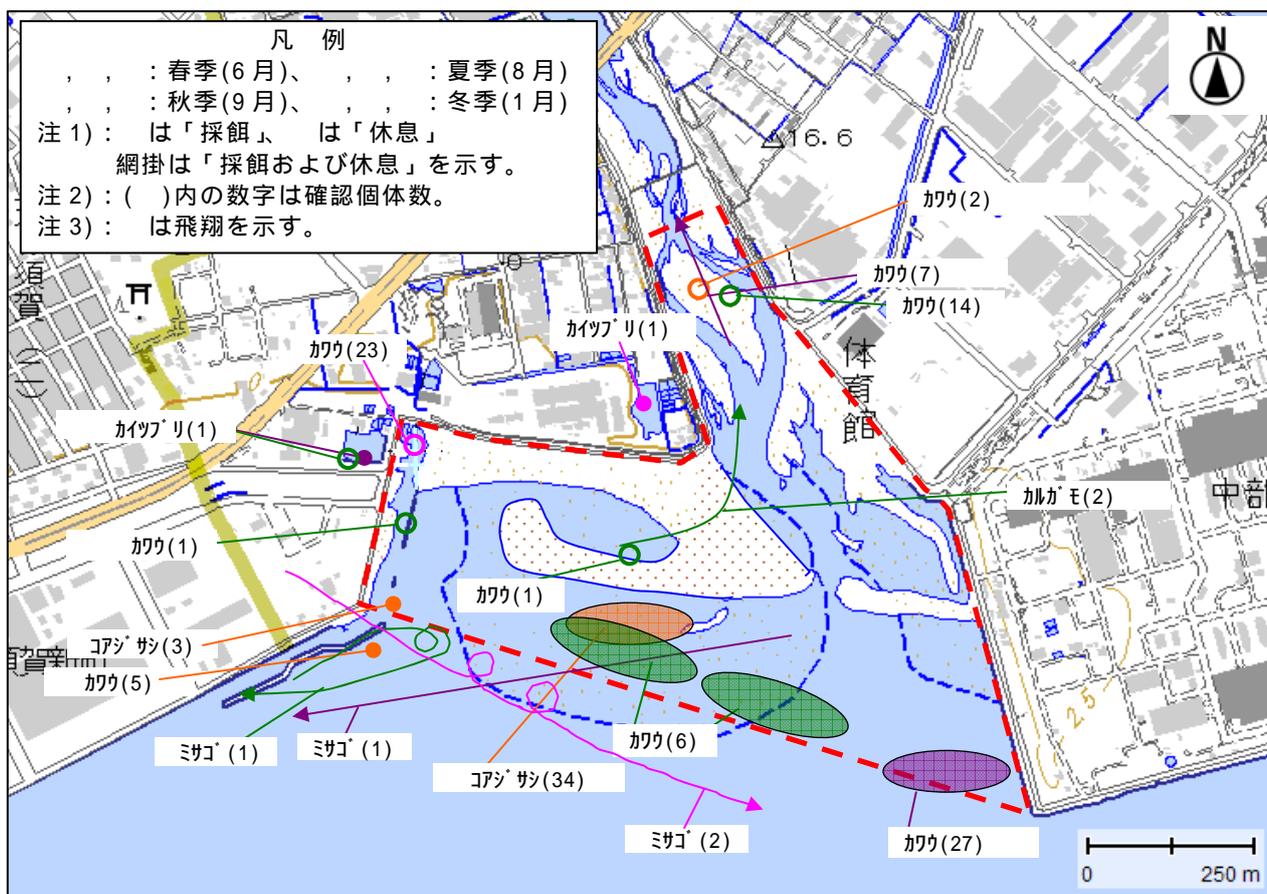


図 2-3-6 カイツブリ、カワウ、ミサゴ及びコアジサシの干潟利用状況



(ミサゴ：1月)



(コアジサシ：6月)

### 3.4.2 サギ類

ササゴイは春と秋に確認され、西側水路及び砂州に囲まれた水域で採食していた。ダイサギ及びアオサギが四季を通じて確認された。コサギは秋季・冬季に確認され、秋季に多かった。ダイサギ・アオサギ・コサギは、干潟や朝明川の中州、西側水路で採食及び休息する様子を確認した。調査範囲内に広く分布していた。

表 2-3-5 サギ類の季節別出現状況

種名	渡り区分	平成23年度				合計
		春季 6月	夏季 8月	秋季 (9月)	冬季 (1月)	
ササゴイ	夏鳥	1		1		2
ダイサギ	留鳥	1	1	4	1	7
コサギ	留鳥			11	3	14
アオサギ	留鳥	2	3	1	1	7
合計	個体数	4	4	17	5	30



図 2-3-7 サギ類の干潟利用状況



(ササゴイ：6月)



(コサギ：9月)

### 3.4.3 陸ガモ類

陸ガモ類は、カルガモが夏季を除いて確認され、その他の種は冬季にのみ確認された。

冬季の西側水路ではコガモ、ヒドリガモ、ハシビロガモ等が、朝明川河口部ではマガモ、オナガガモが確認された。カルガモは主に朝明川河口からその上流で採食や休息していた。

表 2-3-6 陸ガモ類の季節別出現状況

種名	渡り区分	平成23年度				合計
		春季 6月	夏季 8月	秋季 (9月)	冬季 (1月)	
マガモ	冬鳥				4	4
カルガモ	留鳥	5		12	35	52
コガモ	冬鳥				35	35
ヒドリガモ	冬鳥				40	40
オナガガモ	冬鳥				25	25
ハシビロガモ	冬鳥				3	3
合計	個体数	5	0	12	142	159



図 2-3-8 陸ガモ類の干潟利用状況



(カルガモ：6月)



(ハシビロガモ：1月)

### 3.4.4 海ガモ類

海ガモ類は、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモの3種が冬季にのみ確認された。

西側水路部でまとまって確認され、採食や休息をしていた。

表 2-3-7 海ガモ類の季節別出現状況

種名	渡り区分	平成23年度				合計
		春季 6月	夏季 8月	秋季 (9月)	冬季 (1月)	
ホシハジロ	冬鳥				48	48
キンクロハジロ	冬鳥				17	17
スズガモ	冬鳥				2	2
合計	個体数	0	0	0	67	67



図 2-3-9 海ガモ類の干潟利用状況



(ホシハジロ：1月)



(キンクロハジロ：1月)

### 3.4.5 シギ・チドリ類

イカルチドリは冬季に、シロチドリは秋季及び冬季に、トウネン・キアシシギは秋季に、イソシギは四季を通じて確認された。

イソシギ・キアシシギは主に西側水路で採餌を、イカルチドリは朝明川の中州で休息、シロチドリ・トウネンは砂州で休息・採餌が確認された。

表 2-3-8 シギ・チドリ類の季節別出現状況

種名	渡り区分	平成23年度				合計
		春季 6月	夏季 8月	秋季 (9月)	冬季 (1月)	
イカルチドリ	留鳥				1	1
シロチドリ	留鳥			2	11	13
トウネン	旅鳥			4		4
キアシシギ	旅鳥			1		1
イソシギ	留鳥	2	2	2	3	9
合計	個体数	2	2	9	15	28

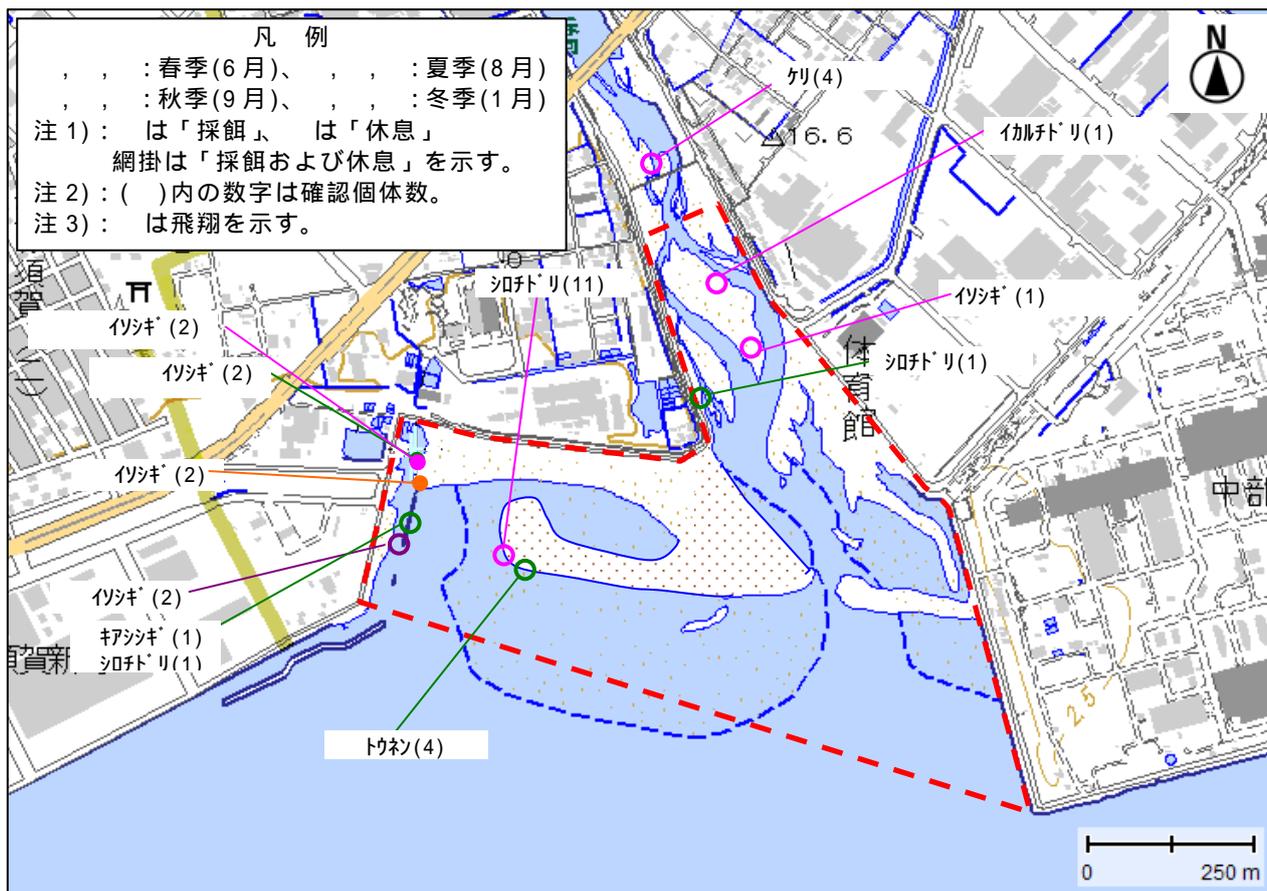


図 2-3-10 シギ・チドリ類の干潟利用状況



(トウネン：9月)



(イカルチドリ：1月)

### 3.4.6 カモメ類

留鳥であるウミネコが四季を通じて確認され、個体数は夏季が最も多く、秋季・冬季と続く。春季は他の季節と比べると少なかった。

ユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメが冬季を中心に確認された。

沖に面した干潟先端部等で多くの個体が採食や休息する様子が確認された。

表 2-3-9 カモメ類の季節別出現状況

種名	渡り区分	平成23年度				合計
		春季 6月	夏季 8月	秋季 (9月)	冬季 (1月)	
ユリカメ	冬鳥		1		360	361
セグロカメ	冬鳥			1	25	26
オオセグロカメ	冬鳥				3	3
ウミネコ	留鳥	80	1447	478	92	2097
合計	個体数	80	1448	479	480	2487

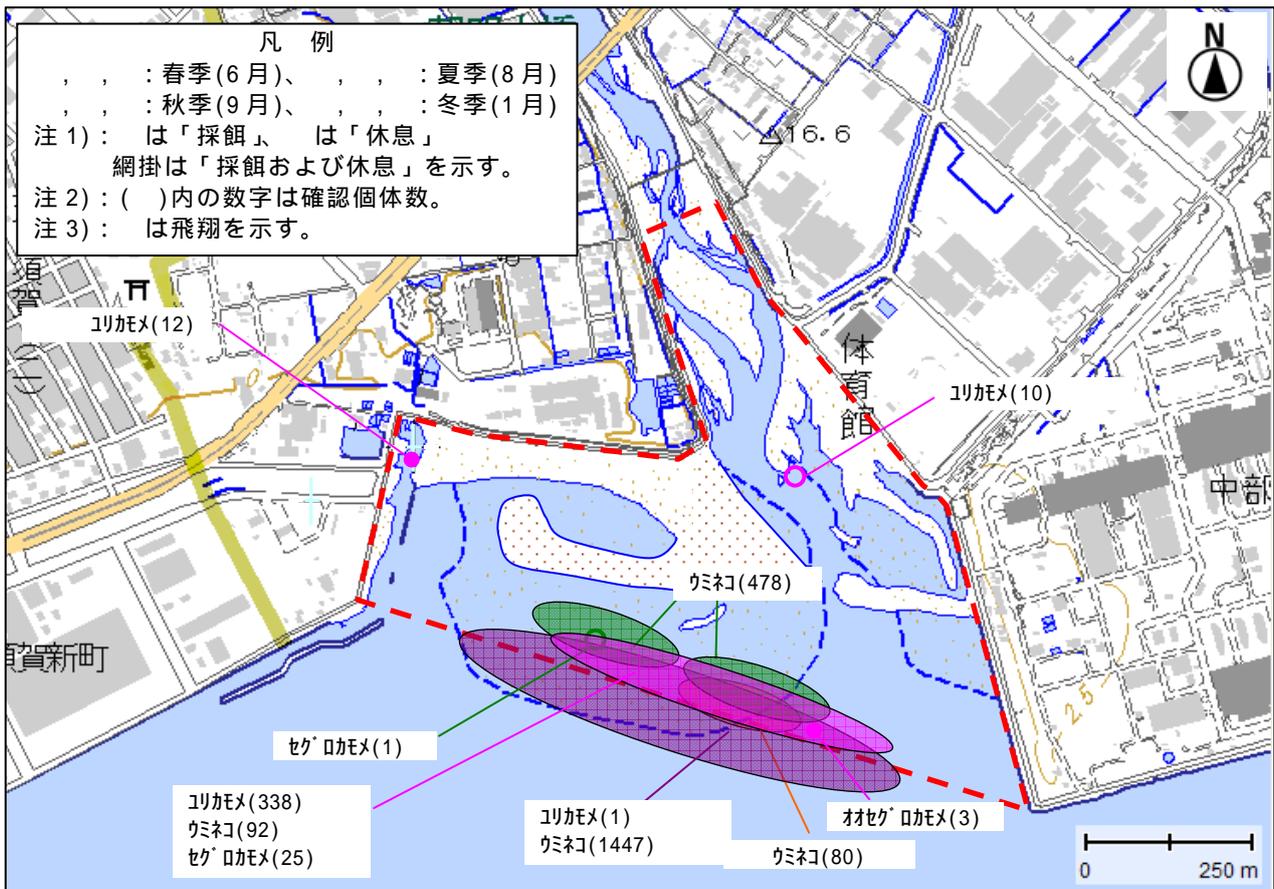


図 2-3-11 カモメ類の干潟利用状況



(ユリカモメ : 1月)



(休息するカモメ類 : 8月)

### 3.4.7 セキレイ類

セキレイ類は、ハクセキレイとセグロセキレイの2種が確認され、いずれも四季を通じて確認された。

両種とも、干潟や草地、西側水路部、朝明川の中州において、1~2個体が水際を移動しつつ採食する様子が確認された。

表 2-3-10 セキレイ類の季節別出現状況

種名	渡り区分	平成23年度				合計
		春季 6月	夏季 8月	秋季 (9月)	冬季 (1月)	
ハクセキレイ	留鳥	6	5	3	4	18
セグロセキレイ	留鳥	1	1	1	1	4
合計	個体数	7	6	4	5	22



図 2-3-12 セキレイ類の干潟利用状況



(ハクセキレイ：8月)



(セグロセキレイ：8月)

### 3.4.8 ハシボソガラス

ハシボソガラスは、四季を通じて確認され、特に夏季に多かった。

ほとんどの個体が干潟に集まり、潮干狩りで掘り起こされた場所で採食している様子を確認した。

表 2-3-11 ハシボソガラスの季節別出現状況

種名	渡り区分	平成23年度				合計
		春季 6月	夏季 8月	秋季 (9月)	冬季 (1月)	
ハシボソガラス	留鳥	81	107	57	37	282
合計	個体数	81	107	57	37	282

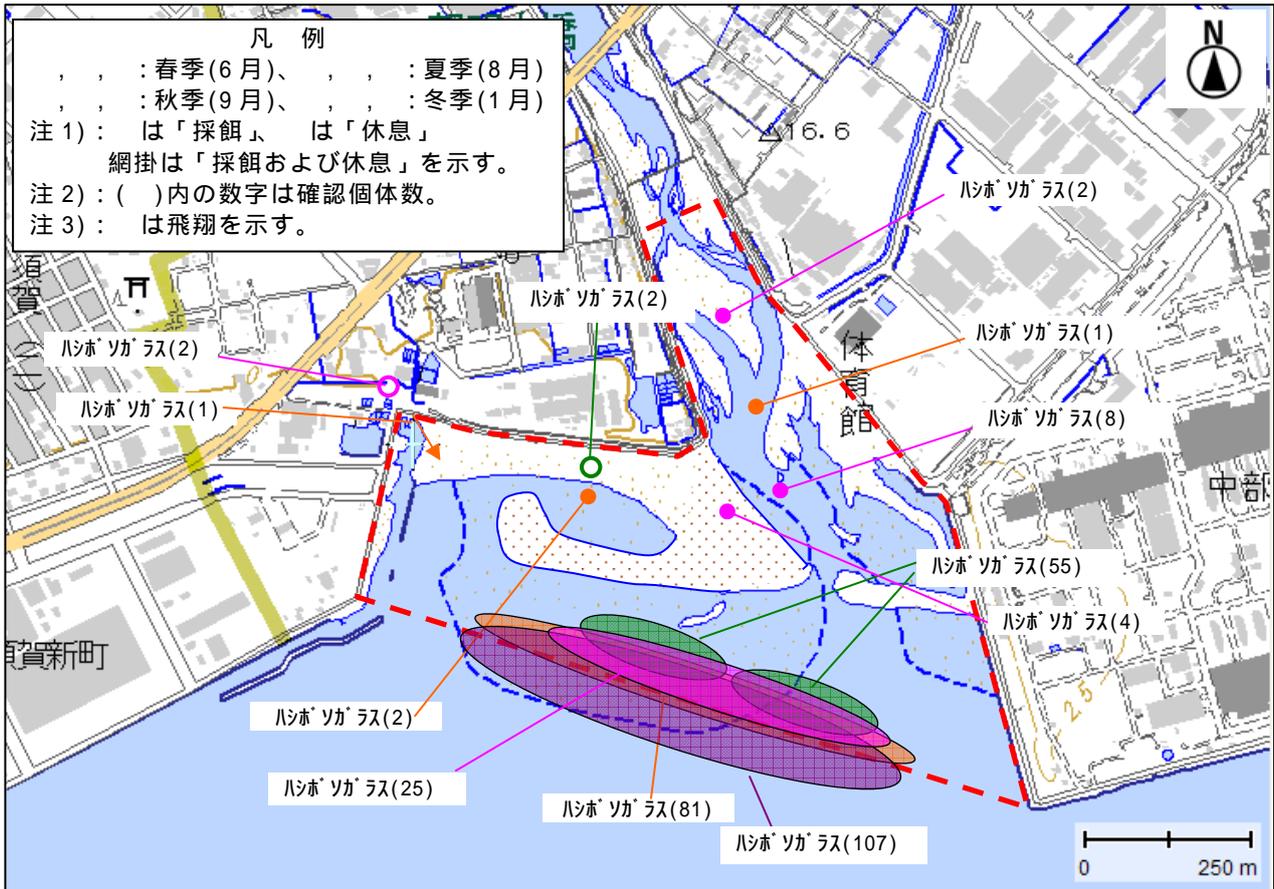


図 2-3-13 ハシボソガラスの干潟利用状況



(潮干狩りに群れるカラス)



(魚の死骸を採食するカラス)

### 3.5 重要種確認状況

法律、環境省及び三重県等の選定による重要種としては、ササゴイ、ミサゴ、サシバ、イカルチドリ、シロチドリ、トウネン、ウミネコ、コアジサシ、セッカの9種が確認された。(写真2-3-1参照)

これらの確認状況及び選定基準等を表2-3-12に、確認位置を図2-3-14に、重要種の生態等を参考1～6に示す。

表2-3-12 鳥類の重要種確認状況

	種名	渡り区分	重要種選定基準			平成23年度				確認状況	
			保存法	環境省 RL	三重県 RDB	近畿RDB	春季 6月	夏季 8月	秋季 9月		冬季 1月
1	ササゴイ (サギ科)	夏鳥			VU	3(繁殖)					西側水路において、春季に採餌中の1個体を確認した。
2	ミサゴ (カモ科)	留鳥		NT	EN	3(繁殖+越冬)					南側海上を西方向へ飛翔する1個体を確認した。
3	サシバ (カモ科)	夏鳥		VU	EN	3(繁殖)					秋季に干潟上空を東から西方向へ飛翔する1個体を確認した。
4	イカルチドリ (チドリ科)	留鳥			VU						冬季に朝明川の中州で休息中の1個体を確認した。
5	シロチドリ (チドリ科)	留鳥			EN	3(繁殖)					秋季に西側水路のテトラポット上にいる1個体を、冬季に砂州上で休息する11個体を確認した。
6	トウネン (サギ科)	旅鳥				3(通過)					秋季に砂州で休息する4個体を確認した。
7	ウミネコ (カモ科)	留鳥				4(越冬)					干潮時に出現する干潟に多数が集まって休息している状況が伺えた。
8	コアジサシ (カモ科)	夏鳥	国際希少	VU	EN	2(繁殖)					春季調査時に海上で頻りに採餌行動をする個体を確認した。
9	セッカ (ウグイス科)	留鳥				3(繁殖)					秋季に西側の草地で鳴声1個体を確認した。

注1)種名及び配列は「日本鳥類目録改訂第6版」(2000年、日本鳥学会)に準拠した。

注2)渡り区分は、「三重県立博物館研究報告 自然科学第1号 2.三重県の鳥類相」(1979年 三重県立博物館)を参考に、一般生態や昨今の県内での確認状況に応じて区分した。

注3)重要種選定基準の「保存法」は「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年6月5日 法律第75号)、「環境省RL」は「環境省レッドリスト 鳥類」(2006年、環境省)、「三重県RDB」は「三重県レッドデータブック 2005 動物」(2006年、三重県)、「近畿RDB」は「近畿地区 鳥類レッドデータブック」(2002年 京都大学学術出版会)を示す。

国際希少：国際希少野生動植物種(国際的に協力して種の保存を図ることとされている絶滅のおそれのある野生動植物の種(国内希少野生動植物種を除く。))であって、政令で定めるものをいう。

EN：絶滅危惧 B類(絶滅の危機に瀕している種で、A類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。)

VU：絶滅危惧 類(絶滅の危険が増大している種。)、NT：準絶滅危惧(存続基盤が脆弱な種。)

2：絶滅危惧種(絶滅する可能性が大きい。)、3：準絶滅危惧種(絶滅する可能性がある。)

4：要注目種(全国や世界で絶滅の危険があるとみなされている。)



ササゴイ (春季：6月)



ミサゴ (冬季：1月)



コアジサシ (春季：6月)



トウネン (秋季：9月)



ウミネコ (夏季：8月)



サシバ (秋季：9月)



イカルチドリ (冬季: 1月)



シロチドリ (冬季: 1月)

写真 2-3-1(2) 確認した重要種

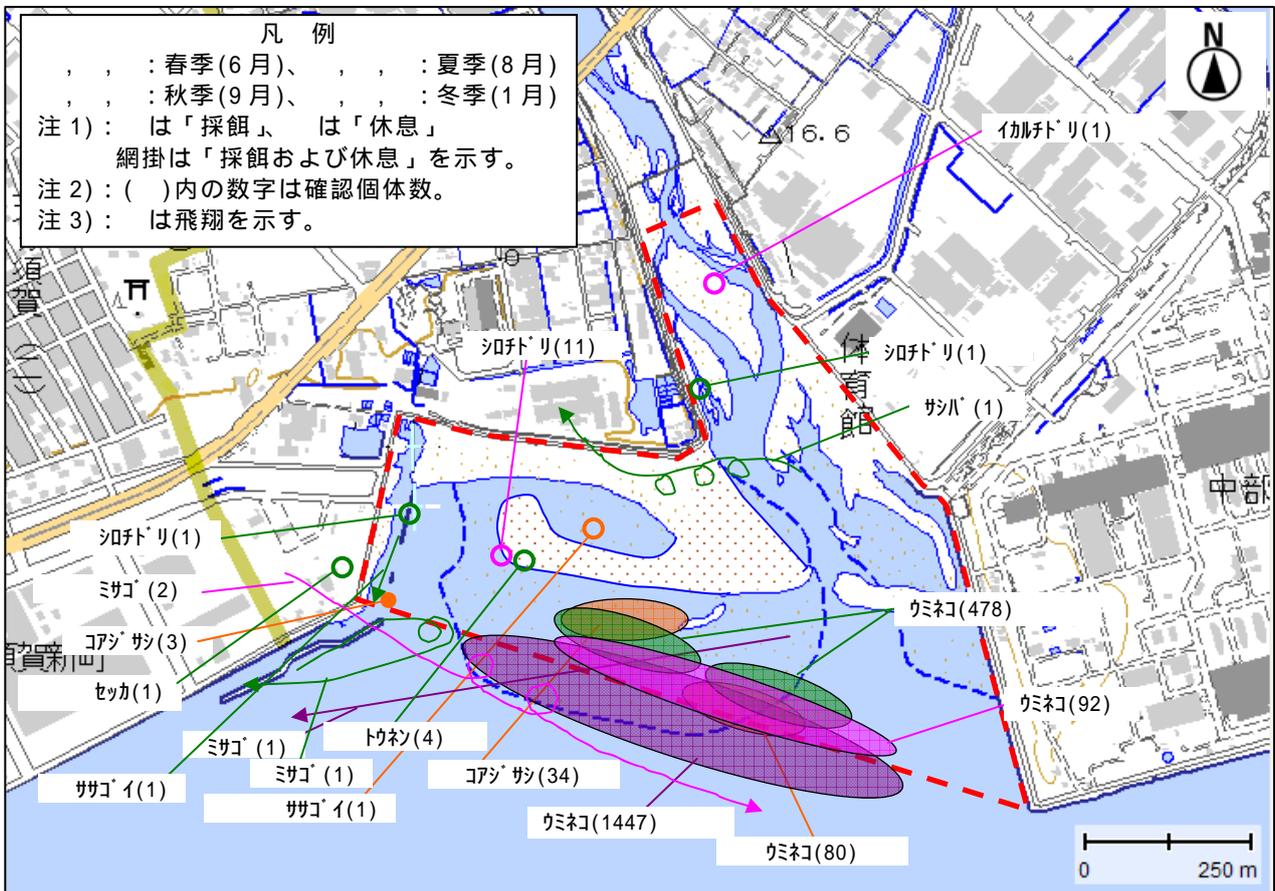


図 2-3-14 鳥類重要種の確認位置図

参考 1 重要な種の生態等 (ササゴイ・ミサゴ)

**ササゴイ**

*Butorides striatus*

三重県：絶滅危惧 II 類 (VU) 国：— 近畿：NT (繁殖個体群)

コウノトリ目 サギ科

**選定理由**

既知の生息地点数が 10 以下，出現範囲が 400 km<sup>2</sup> 以下，開発圧力がある。

**種の概要**

夏鳥。全長約 52 cm。成鳥は頭上が黒色。背と翼の上面は青緑色の光沢のある黒褐色で，下面は淡い紫灰色。大木や比較的高い樹林に小集団で営巣する。

**分 布**

熱帯から，温帯にかけて広く分布。国内では，本州，四国，九州で繁殖し，東南アジアで越冬する。九州南部では少数が越冬する。

**現況・減少要因**

県内では，松阪市，伊勢市などの大木のある社寺林数か所で繁殖している。減少要因は，圃場整備や川や水路の改修による魚類，水生生物の激減。また，ブラックバスやブルーギルの違法・密放流で，おもな餌である小型の在来魚が激減した影響や，カラスによる繁殖妨害の影響が大きい。

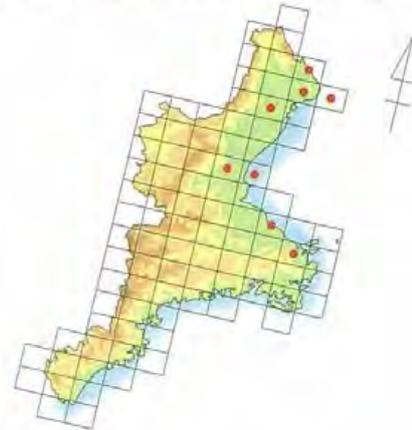
**保護対策**

集団営巣できる大木や樹林の保護およびカラスの個体数調整。河川工事は近自然工法で行い，「環境保全を重視する農林水産業への移行」政策に基づく農地の改良を実施し，魚類や水生生物が豊富な環境を復元することが必要である。

(武田恵世)



ササゴイ 鈴鹿市 2005 年 5 月 市川雄二撮影



**ミサゴ**

*Pandion haliaetus*

三重県：絶滅危惧 IB 類 (EN) (繁殖個体群)，絶滅危惧 II 類 (VU) (越冬個体群) 国：NT 近畿：絶滅危惧種 (繁殖個体群)

タカ目 タカ科

**選定理由**

繁殖期の既知の生息地点数は 5 以下，個体数は 50 未満。越冬期には広い範囲にみられるが，250 未満の個体数しかいないと考えられる。

**種の概要**

おもに留鳥，冬期には越冬個体加わる。体長 54~64 cm，翼開長 155~175 cm，翼は細長く，尾は短い，頭部は白く過眼線が黒く，体の上面は黒褐色，下面は白く，胸に黒褐色の帯。雌雄同色。餌はおもに大型の魚類。海岸の孤立した岩の上や樹上などで営巣する。

**分 布**

極地を除く全世界に分布。国内では，北海道から沖縄で少数繁殖し，冬期には北のものは南に移動する。

**現況・減少要因**

志摩半島以南で少数が繁殖し，冬期には，川越町から尾鷲市の海岸線で確認されている。また，伊賀市の高山ダム湖など内陸部でもごく少数越冬している。減少要因は，魚類の減少，魚類を介した有害物質の体内蓄積や営巣可能な大木の減少などが考えられる。

**保護対策**

海洋資源の持続的活用を進め，魚介類の減少を防止するとともに有害物質による環境汚染を防止し，環境からの有害物質の回収を計る必要がある。また，営巣木となる大木を保護，育成する必要がある。

**文 献**

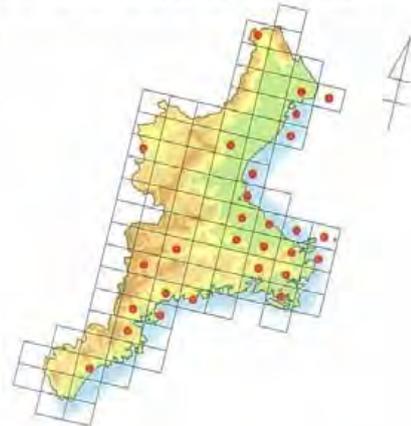
6, 14, 21, 32, 34.

(武田恵世)

出典：「三重県レッドデータブック 2005 動物」(三重県、2005 年)



ミサゴ 松阪市 2006 年 1 月 大矢正雄撮影



## 参考2 重要な種の生態等（サンバ・イカルチドリ）

### サンバ

*Butastur indicus*

三重県：絶滅危惧IB類（EN） 国：— 近畿：絶滅危惧種（繁殖個体群）

タカ目 タカ科

#### 選定理由

県内に広く分布するが、近年、減少傾向が著しい。250未満の個体数しかいないと考えられる。

#### 種の概要

夏鳥。体長約50cm、翼開長約100cm。カラスくらいの大きさで、オオタカに似るが、全身赤褐色。カエルなどの両生類や爬虫類、昆虫類をおもな餌としている。三重県の中央構造線沿いは渡りの重要な経路にあたる。

#### 分布

アムール地方南部から日本で繁殖し、東南アジアで越冬する。国内では、青森県以南で繁殖する。八重山諸島では留鳥である。

#### 現況、減少要因

県内の丘陵地帯で広く繁殖しているが、近年、減少が著しい。例えば、現在、伊賀地方では20つがい前後が繁殖しているが、約20年前に比べ半減している。減少の原因は、圃場整備や河川改修で、川や水路が垂直に近いコンクリート張りにされ、カエル類の往来が遮断され、両生爬虫類が激減したことやアカマツ林や広葉樹林の減少と考えられる。

#### 保護対策

「環境保全を重視する農林水産業への移行」に基づく、農地の改良を早く実施し、両生爬虫類を増やし、自然林を保全し、復元する必要がある。

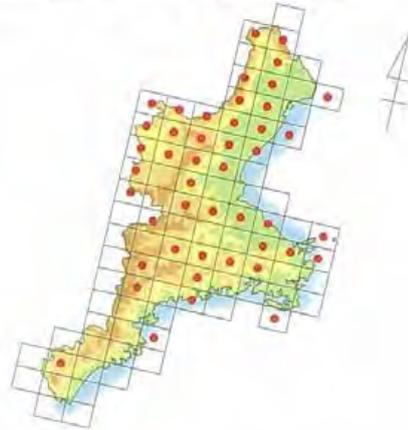
#### 文献

24.

(武田恵世)



サンバ 長野県 2005年9月 林益夫撮影



### イカルチドリ

*Charadrius placidus*

三重県：絶滅危惧II類（VU）（繁殖個体群）、準絶滅危惧（NT）（越冬個体群） 国：— 近畿：NT（繁殖個体群）

チドリ目 チドリ科

#### 選定理由

県内では比較的多く確認されているが、生息および繁殖に適した河原が減少している。

#### 種の概要

留鳥。体長20.5cm。上面はうすい茶褐色で下面は白い。近縁のコチドリに似ているが、少し大きく目のまわりのリングが細い。おもな餌は水生生物である。河川の中流から上流の中洲や河原の砂礫地に営巣する。下流では少ない。

#### 分布

ウスリー地方、中国東北地区、朝鮮半島などに分布。中国南部からミャンマーにかけて越冬する。国内では本州、四国、九州などで繁殖する。

#### 現況・減少要因

県内では、いなべ市、四日市市、鈴鹿市、伊賀市、名張市、松阪市、伊勢市、紀北町、紀宝町など各地の広い河原に少数生息している。冬期は越冬個体加わる。減少要因は広い河原や餌となる水生生物などの減少。また、営巣場所への人の立入りによる繁殖阻害などである。

#### 保護対策

井堰などを土砂が流れ出る構造に改修し、広い河原を確保する。また、営巣場所への人の立入りを制限することも必要である。

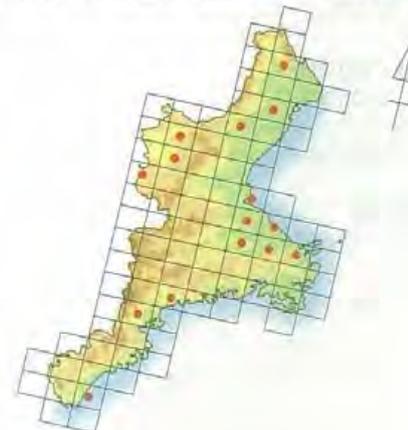
#### 文献

7. 29.

(市川雄二・中井節二)



イカルチドリ 鈴鹿市 2005年8月 林益夫撮影



### 参考3 重要な種の生態等（シロチドリ）

**シロチドリ** 三重県：絶滅危惧IB類（EN）（繁殖個体群）、準絶滅危惧（NT）（越冬個体群） 国：— 近畿：NT（繁殖個体群）  
*Charadrius alexandrinus* チドリ目 チドリ科

#### 選定理由

海岸線に広く分布するが、海浜開発等により営巣環境の悪化が著しい。

#### 種の概要

留鳥。体長17.5cm。スズメより少し大きい。胸には正面でつながっていない黒帯がある。頭と体の上面は灰褐色、体の下面は白く、足は黒い。ゴカイや小昆虫、クモ類などを食べる。

#### 分布

全北区で不連続に繁殖分布し、冬期はアフリカ、インド、メキシコなどに渡る。国内では九州以北で繁殖する。県内では、海岸部に広く分布。

#### 現況・減少要因

北勢地方や中勢地方の海岸の砂浜で繁殖している。七里御浜の海岸では最近の繁殖記録はない。冬期には、伊勢湾、熊野灘沿岸の海岸や干潟などで見られる。減少要因は、海岸浸食や開発による砂浜の減少、繁殖地への人の立入りである。

#### 保護対策

生息、繁殖場所である砂浜の保全、海岸浸食の防止。また、繁殖シーズンには繁殖地への人の立入り制限措置が必要である。

#### 特記事項

県鳥

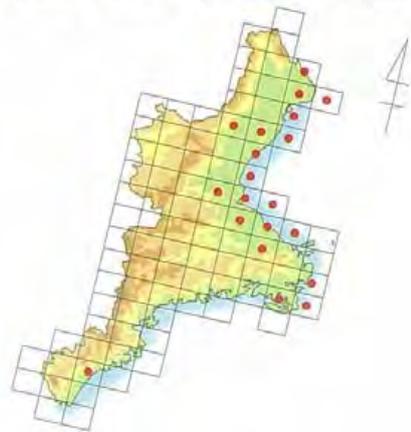
#### 文献

8. 12. 13. 29.

(市川雄二)



シロチドリ 津市河芸町 2005年5月 林益夫撮影



出典：「三重県レッドデータブック 2005 動物」(三重県、2005年)

## 参考 4 重要な種の生態等 (コアジサシ)

### コアジサシ

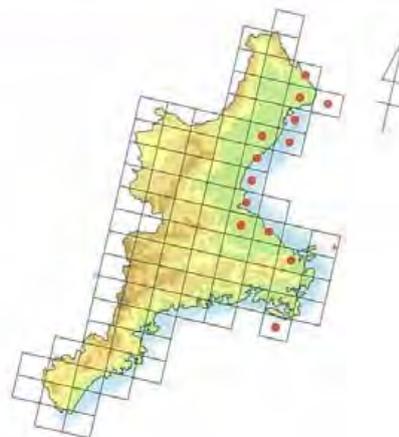
*Sterna albifrons sinensis*

三重県：絶滅危惧 IB 類 (EN) 国：VU 近畿：絶滅危惧種 (繁殖個体群)

チドリ目 カモメ科



コアジサシ 四日市市栢町 2005 年 5 月 林益夫撮影



#### 選定理由

既知の生息地点数は 10 程度であるが、自然状態の繁殖環境がほとんど失われている。

#### 種の概要

夏鳥。全長約 28 cm の小形のアジサシ。体の上面は青灰色で、下面は白色、嘴が黄色で先端が黒い。脚は橙黄色、体が細長く、ツバメのように翼が尖っており、尾羽が二股になっている。夏羽では額が白く、頭上から後頭にかけて黒い。冬羽では、額の白色部が頭頂まで広がり、嘴が黒く、脚が黒か褐色となる。飛びながら、「キリッ キリッ キー キー」と鳴く。餌は小型の魚類で、空中から狙いを付けて水中に飛び込み捕獲し、アジサシの名前の由来となっている。広い河原や砂浜などの裸地に集団で営巣し、集団で防衛する。卵とヒナは、砂礫に似た模様がある保護色である。繁殖成功率が高いのは、およそ 3 ha 以上で植被率約 30% 以下の裸地に、約 500 羽以上が集まった場合である。

#### 分 布

種コアジサシは、ユーラシアから北アメリカの中緯度地帯で繁殖し、ユーラシア南部、オーストラリア、アフリカ、南アメリカで越冬する。極東の亜種コアジサシは、日本と中国東部、南部で繁殖し、東南アジアからニュージーランドで越冬する。国内では、本州の東北地方南部以南に渡来し、繁殖する。県内では、桑名市桑名・長島町、四日市市、亀山市、津市、松阪市松阪・三雲、伊勢市、志摩市で記録がある。

#### 現況・減少要因

約 30 年前は全国的にも普通に見られる鳥とされていたが、自然状態の場所で繁殖に成功した最近の例は四日市市の吉崎海岸、志摩市和具大島などしかなく、非常に少なくなっている。一方、近年は四日市市や桑名市などの工事中の埋立地や裸地で営巣することが多い。減少要因は、ダムや井堰による河川の土砂流下阻害による河原の減少や海岸浸食により、広い砂礫地が激減したことである。

#### 保護対策

現在残されている広い河原や砂浜をこれ以上破壊しないこと。海岸浸食の防止は特に重要であり、河口や沿岸の砂州は可能な限り残す対策が必要である。広い河原や砂浜を復元するには、ダムや井堰の撤去か、土砂流下可能なものに改造するしかないと考えられる。コアジサシやシロチドリなどが営巣する河原や砂浜などの裸地は、川の増水や波浪で 1 年に数回攪乱されることで維持されている環境であり、攪乱がないと草が生え、やがて草原に移行し、営巣ができなくなる。河原の形成や砂州の形成、砂浜の形成など、小規模な自然変化は許容するような河川整備、海岸整備を進める必要がある。具体的には、河川では高水敷は造らず、井堰やダムを統合などにより減らし、また、ダムや井堰からのフラッシュ放流などでの攪乱を行うこと。海岸では、松林を過度に植林しないこと、堤防の前にはハマゴウなどの本来の海岸植物を生育させ、高波による海岸浸食を防止する必要がある。また、川の中州や河口や沿岸の砂州は可能な限り残す必要がある。

(武田恵世)

参考5 重要な種の生態等(トウネン・ウミネコ)

トウネン *Calidris ruficollis* 対象種No.63

ユーラシア大陸東部の北極圏に近い地域で繁殖し、東南アジアからオーストラリアで越冬する。国内では、主に渡りの時に通過するが、しばしば越冬する。昆虫、小甲殻類、小貝類、ミミズ、ゴカイ、草木の種子などを採食する。

世界的に個体数が減少しつつある (del Hoyo et al. 1996)。国内へは1000羽以上の規模で普通に渡来すると考えられる(藤岡ほか1999に基き推定)。

[1] 生息の場所と季節

全府県に渡りの通過個体が定期的に渡来する。大阪府では年により少数が越冬することがある。河川下流・海岸・湖岸の砂洲や干潟だけでなく、河川中流部や田植え前の水田・ため池といった内陸部の植生のない湿地にも飛来し餌をとる。田植え後、稲刈り後の水田にも飛来する。

府県名	季節 移動型	機能	湖沼		河川		移行帯		陸地		海岸		内海		外海		空中		島	
			移行帯 裸地 草原 林縁	水帯 裸地	陸地 裸地 草原 林縁	移行帯 裸地 草原 林縁	水帯 裸地 人工	陸地 裸地 草原 林縁 林	移行帯 裸地 草原	移行帯 裸地 草原	水帯 裸地									
大阪府	通過鳥	採餌	○1					○5												
京都府	通過鳥	採餌						○6												
滋賀県	通過鳥	採餌	○2																	
奈良県	通過鳥	採餌	○3					○7			○13									
兵庫県	通過鳥	採餌						○3												
三重県	通過鳥	採餌	○4					○8												
和歌山県	通過鳥	採餌						○9												
								○10												

1:水を放いた平地のため池, 2:琵琶湖及び周辺の湖沼, 3:平地の湿地, 4:平地・丘陵の広いため池, 5:中流～下流, 6:泥質の多い中流, 7:下流～河口  
8:広い河川の中流～下流, 9:下流～河口の砂洲や干潟, 10:河口, 11:水田や休耕地, 12:水田, 13:刈り取り後の水田, 14:平地の休耕地  
15:水田・ハス田・裸田・休耕地, 16:水をはった休耕地, 17:干潟, 18:干潟や海浜

[2] 生息の現状と見通し

各府県の通過個体群の生息状況はまずまずわかっている。個体数は2桁から4桁までさまざまだが、ほとんどの府県で減少しており、海岸・湖岸・河川・水田・ため池の整備・改修・埋立て等による生息環境消失の危険がほとんどの府県である。個体数が2桁で減少しており、かつ生息環境消失の危険がある奈良県と、個体数は3桁だが減少していて、かつ生息環境消失の危険度が大きい大阪府では絶滅する可能性が大きい。京都・滋賀・三重・和歌山の4府県では絶滅する可能性がある。

府県	季節	対象	繁殖確認	生息情報の	分布	生息環境の	生息	個体数の	絶滅危険	備考
移動型	個体群	ラング	信頼度	パターン	消失危険度	個体数	増減	ラング		
大阪府	通過鳥	通過	高	集中	大	3桁	減少	2	年により少数が越冬	
京都府	通過鳥	通過	中	まばら	なし	2桁	減少	3		
滋賀県	通過鳥	通過	中	まばら	あり	3桁	減少	3		
奈良県	通過鳥	通過	中	集中	あり	2桁	減少	2		
兵庫県	通過鳥	通過	高	集中	あり	4桁	増減なし	4		
三重県	通過鳥	通過	中	集中	あり	3桁	減少	3		
和歌山県	通過鳥	通過	中	集中	あり	2桁	増減なし	3		

生息環境の消失原因: 【大阪府・奈良県・兵庫県】ため池の整備・埋立造成, 【滋賀県】琵琶湖岸の整備・改修, 【兵庫県】水田等の埋立て・整備, 【和歌山県】田圃整備  
【大阪府・滋賀県・奈良県・兵庫県・三重県・和歌山県】河川改修, 【大阪府・兵庫県・三重県・和歌山県】干潟や砂洲の埋立て・整備

ウミネコ *Larus crassirostris* 対象種No.97

近畿地方での繁殖地がきわめて限られており、何らかの擾乱により一気に絶滅する可能性がある。

日本、朝鮮半島、サハリンなどの周辺のみ繁殖し、繁殖地の周辺から台湾周辺にかけての海域で越冬する。国内では、北海道、本州、九州、および周辺の島で繁殖する。非繁殖期は、本州、四国、九州などに広く生息する。海岸の岩場などの地上で、集団で営巣する。魚、

さまざまな死骸、生ゴミなどを採食する。

世界に35万羽が生息するという推定があり、個体数が特に減少しているとは考えられていない (del Hoyo et al. 1996)。国内の繁殖つがい数はおよそ10万と推定されており、増加傾向にあるとされる(環境庁自然保護局生物多様性センター1999)。近畿地方での繁殖地は、京都府の丹後半島・杵島、和歌山県の白崎海岸・あま取島のみ。

[1] 生息の場所と季節

府県名	季節 移動型	機能	湖沼		河川		移行帯		陸地		海岸		内海		外海		空中		島	
			移行帯 裸地 草原 林縁	水帯 裸地	陸地 裸地 草原 林縁	移行帯 裸地 草原 林縁	水帯 裸地 人工	陸地 裸地 草原 林縁 林	移行帯 裸地 草原	移行帯 裸地 草原	水帯 裸地	水帯 裸地	水帯 裸地	水帯 裸地	水帯 裸地					
大阪府	冬鳥	採餌			○2			○2												
京都府	留鳥	営巣																		○6
滋賀県	冬鳥	採餌	○1		○1															
奈良県	通過鳥	採餌			○															
兵庫県	冬鳥	採餌						○3												
三重県	冬鳥	採餌																		
和歌山県	留鳥	営巣						○2												○

1:琵琶湖, 2:下流, 3:下流～河口, 4:港湾施設, 5:埋立地, 6:地表が草地の島

[2] 生息の現状と見通し

府県	季節	対象	繁殖確認	生息情報の	分布	生息環境の	生息	個体数の	絶滅危険	備考
移動型	個体群	ラング	信頼度	パターン	消失危険度	個体数	増減	ラング		
大阪府	冬鳥	越冬	高	まばら	なし	4桁	増減なし	4	多数の非繁殖期夏個体有	
京都府	留鳥	繁殖	A-1	極めて集中	あり	4桁	増減なし	4		丹後半島に約100巣, 杵島に1600巣以上
滋賀県	冬鳥	越冬	高	集中	なし	4桁	増減なし	4		
奈良県	通過鳥	通過	高	極めて集中	なし	2桁	増減なし	4		
兵庫県	冬鳥	越冬	高	集中	なし	4桁	増減なし	4	非繁殖期夏個体有	
三重県	冬鳥	越冬	高	まばら	なし	4桁	増減なし	4		1970年代までは繁殖記録あり, 非繁殖期夏個体有
和歌山県	留鳥	繁殖	A-1	極めて集中	大	4桁	増減なし	4	4箇所で100-200巣	

主な繁殖地: 【京都府】丹後半島、杵島, 【和歌山県】由良町白崎海岸、美浜町あま取島  
生息環境の消失原因: 【京都府・和歌山県】営巣地への釣り人などの立ち入り

参考 6 重要な種の生態等 (セッカ)

セッカ *Cisticola juncidis* 対象種No.160

近畿地方における生息状況

[1] 生息の場所と季節

府県名	季節 移動型	機能	湖沼			河川			陸地			海岸			内海			外海			空中	鳥
			移行帯 裸地	草原	林縁	水帯 裸地	陸帯 裸地	林縁	移行帯 裸地	草原	林縁	水帯 人工	陸地 裸地	草原	林縁	林	移行帯 裸地	草原	水帯 裸地	水帯 裸地		
大阪府	留鳥	営巣+採餌	○1			○3			○3						○7							
京都府	留鳥	営巣+採餌				○3			○3						○8							
滋賀県	留鳥	営巣+採餌	○2			○4									○9					○10		
奈良県	留鳥	営巣+採餌				○5									○5							
兵庫県	留鳥	営巣+採餌				○6									○11							
三重県	留鳥	営巣+採餌				○3									○12							
和歌山県	留鳥	営巣+採餌				○3									○8							

1：平地のため池，2：琵琶湖岸，3：中流～下流，4：大きな河川，5：平地～低山，6：中流～河口，7：埋立地・造成地，8：休耕田，9：牧場  
10：イネの生育した水田，11：平地～山地，12：平地～丘陵の草地・休耕田

[2] 生息の現状と見通し

府県	季節 移動型	対象 個体群	繁殖確認 ランク	生息情報の 信頼度	分布 パターン	生息環境の 消失/除去	生息 個体数	個体数の 増減	絶滅危険 ランク	備考
大阪府	留鳥	繁殖	A-1	高	集中	あり	3桁	減少	3	
京都府	留鳥	越冬	A-1	高	まばら	あり	2桁	減少	2	
滋賀県	留鳥	繁殖	A-1	中	集中	なし	2桁	増減なし	4	
奈良県	留鳥	繁殖	A-1	中	まばら	あり	4桁	増減なし	4	
奈良県	留鳥	越冬	A-1	高	集中	あり	3桁	減少	3	
兵庫県	留鳥	繁殖+越冬	A-1	高	まばら	あり	4桁	増減なし	4	
三重県	留鳥	繁殖+越冬	B-3	中	集中	あり	3桁	減少	3	
和歌山県	留鳥	繁殖+越冬	A-6	中	まばら	なし	4桁	増加	4	

生息環境の消失原因：【全府県】河川改修，【大阪府】ため池の埋立て，【滋賀県】琵琶湖岸の整備，【大阪府】埋立地の整備  
【大阪府・兵庫県・三重県】宅地造成や道路建設のための埋立て，【奈良県・兵庫県】草原の開発

出典：「近畿地区鳥類レッドデータブック」(京都大学学術出版会、2002年)